

## ホテイランの山

夏井高人

日本にはホテイラン属 (*Calypso*) に属するラン科植物が2種類あるとされている。青森県のヒバ林に分布するヒメホテイラン (*Calypso bulbosa* var. *bulbosa*) とホテイラン (*Calypso bulbosa* var. *speciosa*) だ。その相違点は、唇弁の下に距の先端がはみ出ているものがホテイランであり、はみ出していないものがヒメホテイランだとされている。

ところが、欧州のラン科植物図鑑を読んでも、唇弁の下に距がはみ出ているものとはみでていないものとを区別せずに *Calypso bulbosa* var. *bulbosa* として写真を掲載しているのが一般的だ。また、ごく最近、ロシアの Averianov 博士が撮影した *Calypso bulbosa* var. *bulbosa* の写真を目にする機会があった。その写真を検討してみたところ、ロシアの自生地では、距が唇弁の下にはみ出ているものとそうでないものとが混在していることが分かった。*Calypso bulbosa* var. *speciosa* は、日本、朝鮮及び中国に自生するとされているから、距が唇弁の下にはみ出しているタイプのものは、ロシアにはないはずなのだが、博士の写真にはちゃんと写っている。ちなみに、米国に自生する *Calypso bulbosa* var. *americana* と *Calypso bulbosa* var. *occidentalis* でも、距が唇弁の下にはみ出しているものとそうでないものがあり、かつ、異常なまでに多様な花色の変化があつて、しかも、ユーラシア大陸のものと全く異なるタイプのものもある。つまり、距の形状の相違によってホテイランの仲間を細かく分類・区別することはできず、本当は同一の種類に属する植物と理解するのが正しいのかもしれない。

しかし、Kew Garden のデータベースでも GRIN のデータベースでも、このホテイランとヒメホテイランとを区別する扱いをしている。

このようなことから、本稿では、ホテイランとは講学上の *Calypso bulbosa* var. *speciosa* のことを指すということにする。

さて、ホテイランは、日本に自生する野生ランの中でも最も美しいランのひとつとされ

ている。

ホテイランは、見る人によってその評価がかなり異なっている。「山の妖精」だと賞賛する人がある一方で、マルチタレントのデーモン小暮さんに似ているという人もある。属名からして「カリプソ (*Calypso*)」であり、極めて妖艶な名前なので、どちらの見解も正しいのかもしれない。カリプソは、ホメロスの叙事詩に出てくる女性の名だ。彼女は、トロイア戦争の帰路、船が難破して彼女の島に漂着したオデッセウスを誘惑し、性愛の虜にし、7年もの間、オデッセウスが故国の自宅に帰還するのを妨げたという。これを性愛の魔力を檻にした幽閉の一種と考えるか、それとも、オデッセウスの浮気ととらえるかは読者の見解によって異なるかもしれない。

ともあれ、私はどう思っていたのかというと、図鑑などの写真で観る限り、「とても美しいランであることは間違いない」と思っていた。そして、恋焦がれるほどというわけではないけれど、「自分が生きている間にせめて一度くらいは出遭いたいものだ」思う野生ランの中でも上位に位置するもののひとつだった。

そのホテイランが八ヶ岳あたりの山地のどこかに自生しているということは以前から聞いて知っていた。ところが、八ヶ岳それ自体が複数の山々で構成される連峰として存在しており、標高差が著しく、かつ、その周辺の山地となると極めて広大な地域になってしまう。そこで、インターネットで情報を探しまくったところ、ある程度まで地域を絞ることはできた。とは言うものの、それでも相当広い範囲が含まれてしまうので、「独力で探し出すことは不可能だろう」と諦めていた。

さりとて、ホテイランは、ラン菌との依存関係が極めて強く栽培不可能な植物だというのが定説であり、実際、これまで長期間にわたり栽培を継続した例はないと聞いている。だから、このような栽培不可能なランについては、栽培品を購入して育て、花を觀賞することもできないということになる。時折、ホテイランの苗をネット上で売っているのを見かけることがある。けれども、無菌実生苗でない限り、栽培による増殖品であるわけがない。そのような自生を採取した苗を購入しても、ただ殺すだけで終わってしまい、結局、

自生の個体数を減少させることだけに寄与してしまうことになる。結果的に、保護条例違反行為に加担することになってしまう可能性も高い。

というわけで、「よほどの幸運に恵まれなければホテイランを見ることはできないだろう」と考えていた。

しかし、その幸運は、意外とあっさりとやってきた。およそ「幸運」というものは、そうしたものなのかもしれない。

今年になって、Mさんから、「ホテイランの自生地を調査し、自生地での保護・増殖活動をするためのフィールドワークがあるから一緒に来ないか」との趣旨のお誘いを受けた。とてもありがたいことだ。信頼を得ていなければ、お誘いを受けることもないだろう。ホテイランを見に行けるということより以上に、私のことを信頼していただけたことがとても嬉しかった。

予定として聞かされていたスケジュールはとてもハードなものだったし、そもそも集合時間が早朝と予定されていたため、集合場所の近くで宿をとって前泊するしかない。裕福な身分でもないのだから「出費が辛い」というのが本音のところだ。でも、こんな素敵な機会は二度と来ないかもしれない。迷わず、快諾した。

その朝、前泊したビジネスホテルをチェックアウトし、集合場所に向かった。そこでKさんの運転するクルマに拾ってもらい、更にMさんと合流した上で、高速道路をひた走る。途中で1箇所だけひどい渋滞に巻き込まれてしまったけれど、全体としては予想以上にスムーズに移動できたのではないかと思う。

ホテイランの自生地としては、複数の場所があるらしい。その中の2箇所に行ってみるようになった。クルマはどんどん山を登っていく。そして、ある場所に到着すると、そこでクルマをとめ、そのあとは徒歩で登山となった。

道すがら目にする針葉樹の枝には保護のためのカバーがかけられている。シカの食害を防ぐためという。林床にはコキンバイと思われる可愛らしい黄色の花が咲いていた。

そして、しばらく歩いて予定の場所に到着した。しかし、そこにはなかった。針葉樹の

枝打ち作業でさんざん踏み荒らされた後、日照がよくなりすぎた結果、その場所では絶滅してしまっただけ。そこで、その奥に入ってみた。

「見つからないなあ・・・」と多少がっかりしながら、林内を探しまわった。そのあたりにはミツバオウレンの花やマイヅルソウの葉くらいしか見つからない。当然、失望感が高まる。

すると、向こうのほうから K さんが「あった！」と大声で呼んでいるのが耳に入った。即座にその場所に行ってみた。

確かに、ホテイラン。感激の対面だ。この日が来ることをどんなに待ちわびたことか・・・夢中になってそのホテイランの写真を撮っていると、M と K さんが「こっちにもある」と次々と声をあげる。見渡すと、目が慣れてきたせいかどうか、比較的多数の個体が周囲に生えていることが分かった。

いつも思うことなのだが、あまりに待ち焦がれ続けた「希少ラン」には、ある種の幻想のような固定観念が固着するものらしい。「ほとんど絶滅寸前の状態で、あくまでも気高く、深山の涼風にそよぎながら、人知れず孤高の美を誇る最後の個体に目を潤ませながら、深く嘆息する自分」といったイメージがそれだ。しかし、現実に自生地を訪問し、結構多数の個体が生息していることを認識すると、何となく固定観念上の「美学」の一種のようなものが破壊されてしまったような気分になってしまう。これは、単なるわがままかもしれないし、また、ある種の自己愛の変形物であるのかもしれない。よく分からない。

それはともかく、かすかな「がっかり感」と「こんなにたくさん自生していて良かった」という喜びの気持ちとが複雑に入り混じった心理状態で、そのあたりのホテイランの調査を続けた。中には白っぽい花を咲かせる個体もある。いわゆる酔白というタイプだ。これまたとても美しい。

更に驚いたことには、白地に赤紫が入ったような不思議な葉の個体があった。それを発見した超ベテランの M さんでさえ、これまで見たことがないものだという。「これはいったい何なのだ？」とあれこれ議論した。あとで冷静になってから意見交換をした結果、「葉

の葉緑素が抜けている曙斑であり、葉の裏面の赤紫色が透けて見えていたのだろう」というのが現時点での結論。

ともあれ、そのようにして、ホテイランの様々な姿を観察し、そして、予定していた作業を無事に終えることができた。

その後、途中で昼食をとりながら移動し、たどりついた2つ目の場所。そこは、転げ落ちそうな急斜面だった。もちろん、その斜面を降りてみることにした。

ところが、昨年と比較するとひどく個体数が減少しているとのこと。シカの糞が落ちていたから、もしかすると食害によるものかもしれない。また、植生を観察すると、乾燥が進みササが大規模に侵入している。このような植生の変化（遷移）がある場合、それが自然の状態なので、どうすることもできない。

遷移が生じていると推定される場合、意図的・人工的に環境を修正して遷移を逆行させることが許されるのかどうかについては、意見が分かれている。我々としては、あるがままの状態を観察し、個体数を数え、そして、予定していた作業を黙々と進めた。

結論としては、主として生えている場所が移動しているように思われる。その原因は確定できない。今後、継続的に調査をしてみなければはっきりしないのだけれど、今回の調査ではそのための最初の作業を遂行することができたのではないかと思う。

一般に、ホテイランの仲間が受粉し、結実するまでのおおよその日数は既に判明しているとのことだ。そのころには自生地が藪の中のような状態となり、ほとんど識別不可能な状態になっているかもしれない。でも、結実するころに再び調査に入ることなので、ぜひともご一緒させてもらいたいものだと思っている。

